



《タイトル不明》制作年不明 | ボールペン、紙 | 304×424mm

舟木伸夫

FUNAKI Nobuo

1969 年生まれ | 島根県在住

所属：社会福祉法人四ツ葉福祉会 四ツ葉園

あらかじめ描く数日前にモチーフを決め、ひたむきにペンをとる日々。

2017 年頃までは、好きな車や電車は細部まで描かれ、力強いアウトラインを伴い、油性ペンの特性を活かした奔放な表現がみられた。

画面の中には描いたモチーフを補足するキャプションのように、自身の名前や車種やメーカーなどの文字が加えられていた。

そのような作画が続いていたが、2020 年末に拠点を京都から島根県の四ツ葉園に移したその頃にボールペンを多用するようになった。

やがてボールペンの細かい線は文字の割合を増加させ、その反復をもって空白は覆い尽くされることもある。

描かれる文字は図像そのものを指す名称もあるが、注意深く見ると関連性が無いような芸能人なども描かれていることもある。

また「とりの絵です。」といった文章もあり、その読点は R マーク（商標登録済みの商標）であることも魅力のひとつ。

文字は図像を補足する情報としての役割を果たし終え、作画の主体へと変容するユニークな過程が見て取れた。

海外での展示を経た現在も様々な文字情報と図像が混在する新しい絵画を生み出している。

Dub Dub Draw

ダブ・ダブ・ドロー

2025.9.3/水-11.30/日

10:00-18:00 (※月・火曜定休)

入場料：無料

本展では、木村全彦、小林譲治、舟木伸夫、の3名の作品をご紹介します。タイトルの「Dub」とは音楽用語ではダビングに由来した、オリジナル音源にエコーなどの処理をした楽曲形態を指します。3作家に共通される反復することや重ねる技法などを「Dub」と捉え、そこに描画することを組み合わせた「Dub Dub Draw」をタイトルにしました。

木村の作品は「キュニキュニ」と呼ばれる紋様が繰り返し画面の中に現れ、独特の視覚的効果を生んでいます。有機的に表面化する紋様と大胆な構図、強い色彩の調和は不思議と見る人を引き込みます。

舟木は乗り物や動物などを油性のフェルトペンで彩色を施し、その周りに自身の氏名やモチーフの名称などを書き込んでいましたが、近年ではボールペンを駆使し文字を主体とした描き方に推移してきました。紙という限られた2次元のなかに数字や文字を繰り返すことで生まれる残響で空間を満たしていきます。

一方、何か意図した形の集積ではないと語り、その細やかな線で画面を構成していくのは小林。どこか素朴でおおらかな空気感を持つ作品を多く制作するなかで、時に鋭く底知れぬ景色を増幅させたような作品に出会うことがあります。細やかなタッチは浮遊感のあるグルーヴとなって新たな眺望を見せています。

ここに集った新鮮な驚きを誘う約40点の作品を、どうぞこの機会にご堪能ください。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました作家の皆様、本展の実現のためにご協力を賜りましたすべての方々に、心よりお礼申し上げます。

2025年9月

art space co-jin (きょうと障害者文化芸術推進機構)

主催：art space co-jin(きょうと障害者文化芸術推進機構)

協力：京都市ふしみ学園 アトリエやっほう!!、社会福祉法人新明塾 ju:彩ギャラリー、社会福祉法人四ツ葉福祉会 四ツ葉園、島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ



《鮭を啜えた熊》2023
色鉛筆、イラストボード | 728×515mm

木村全彦

KIMURA Masahiko

1984 年生まれ | 京都市在住

所属：京都市ふしみ学園 アトリエやっほう !!

2008 年に施設内に設立した「アトリエやっほう !!」にて本格的に絵を描き始めた。モチーフになる写真などを支援員と選定した後、その資料を分析するような眼差しで見つめながら、150 色セットの色鉛筆を用いて作画を始める。時には紙が破れるほどの力強い筆圧から生み出される深みある色彩をまとう木村の作品は、随所に楔（くさび）形の紋様が現れ、ミステリアスな魅力を放つ。

楔形文字を意味するラテン語由来の”cuneiform”（キューニフォーム）から「キューニキューニ」という愛称で呼ばれている。その楔形は、何色もの組み合わせによって視覚混合（隣り合う色が混ざり合っ見える視覚効果）が生まれ、実際に使用される色数の何倍もの色彩が目飛び込む。

ゆえに鑑賞する距離や写真などを通すと見え方が違ってくることも、作品の面白さとなっている。例えば展示作品「ジャガー」の構図は画面に向かって左を向いている顔のクローズアップであるが、近距離ではその認識は難しい。少し作品から離れると輪郭が浮かんでくる。こうして鑑賞者の視線を一箇所に留まらず浮遊させ、エコーのように何度も感覚がフィールドバックされる。

作品は国内外での評価も高く、KOMOREBI 展（2017/ フランス/ フランス国立芸術センター「リュウ・ユニック」）出展、2025 年には美術の教科書（展示資料：光村図書 _ 美術 2・3 _ P105）に掲載され、さらに多くの注目を浴びている。



《京都のお寺のお庭》2024
ボールペン、色鉛筆、フェルトペン、紙 | 700×500mm

小林譲治

KOBAYASHI Joji

1958 年生まれ | 京都市在住

所属：新明塾 ju: 彩ギャラリー

京都市の福祉施設「新明塾」との出会いは 1975 年、創立当時からメンバーである。

80 年に始まった絵画教室に参加して以来、描くことは今日まで生活の一部となっている。

京都の観光地や家族旅行の思い出の場所を好んで描く。自然が対象であることが多く、冬の終わりにやわらかな春の絵、梅雨の時期には夏色で彩られるように、季節感が色とともに出てくる。体調が悪いと無彩色の石垣や地面、岩山などを描き続ける。そのような日常の変化のきざしや気配を察知する豊かな感受性は、絵画だけでなく俳句の制作などでも発揮されている。

和かにニュースや野球情報などの会話を交えながら、複数の色鉛筆やサインペンを同時に並行させ、飽きることなく継続的に描くことが営みであった。そこに近年、ボールペンで細かいモザイク（蜘蛛の巣）調の幾何学的模様の線で埋めていく描き方が加わり、画調に変化が見られるようになった。小林が「細かい模様が勝手に出てくる」と語ることから、それらは文字でもなく、特定の何かを描写しているものではない。多様な線を使い分け、赴くままに描く独自のスタイルを貫いている。